学びの見方

長岡健
法政大学経営学部教授

近年、ビジネス分野での人材育成において、「ワークプレイスラーニング」という概念が注目されている。ワークプレイスラーニングとは、一般に「仕事の中で生じる行動変化や成長を通じて、個人・組織のパフォーマンスが向上すること」と理解されているが、従来的な「教育訓練」との違いとして、以下の 3 点を挙げることができる。

1) 実務家の学習・成長とは、「知識・スキルの獲得」ではなく、「仕事上のパフォーマンス向上」を意味する。
2) 実務家の能力は、「公式の教育プログラム」だけでなく、「現場における仕事」を通じて開発される。
3) 実務家の能力開発は、「教わる」ことだけなく、「様々な仕事の経験」や「現場での他者とのかかわり」を通じて達成される。

そして、ワークプレイスラーニングという概念の浸透によって、現場での経験を通じた学習と成長の意義が、多くのビジネス関係者に認識されるようになった。ビジネス分野に限らず、「実務家の学びと成長」について考えるとき、この概念浸透の意味は大きい。

しかし、環境変化の激しい今日のビジネスにおいては、現場経験を通じて獲得した経験知・実践知も、すぐに因習と化してしまう。このような環境においては、過去の経験が役立たないだけでなく、むしろ、新たな状況に適応することを妨げることにもなりかねない。従って、様々な側面において激しく変化し続ける今日の社会環境下では、「経験を通じた学び」とは異なるアプローチが求められることになる。

組織学習論では、時代遅れとなった知識や考え方を捨て去ることをアンラーニング（学習棄却）と呼び、知識を「身につける」ことだけではなく、「捨て去る」こともまた実務家の学びと成長にとって重要であることを強調している。今回の講演では、実務家の学びに関する近年の動向を整理し、その特徴と課題を明らかにする。そして、アンラーニングという概念を起点として、「変化の時代」に求められる学びの姿を探っていきたい。

－ 略歴 －

東京都生まれ。慶應義塾大学経済学部卒、英国ランカスター大学マネジメントスクール博士課程修了（Ph.D.）。専門は組織社会学。「学習と組織」をめぐるステークホールダーの行動や言説を、社会理論、学習理論、コミュニケーション論の視点から読み解いていくことが研究テーマ。アンラーニング、サードプレイス、エスノグラフィーといった概念を手掛かりとして、「大人の学び」の新たな意味と可能性を探るための学習環境デザインに取り組んでいる。共著に『企業内人材育成入門』『ダイアローグ　対話する組織』など。
【web】http://www.tnlab.net/　【twitter】TakeruNagaoka

指定発言者：

梅澤貴典（中央大学 ビジネスクール事務室）
小嶋智美（NPO 法人日本医学図書館協会 正会員個人）
塚田薫代（静岡県立こども病院 医学図書室）

★ＭＥＭＯ★